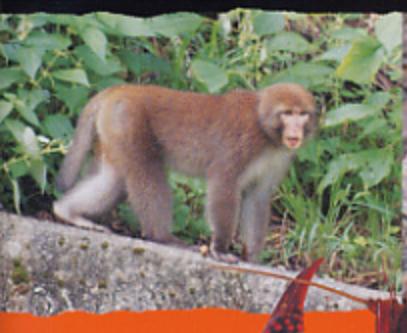


外来種 ハンドブック

日本生態学会○編

村上興正・鷺谷いづみ○監修

Handbook of Alien Species in Japan



日本生態学会50周年記念出版

外来種問題の すべてがわかる!



執筆者総数約160名、140種以上の外来種と21の地域事例を記載。日本における外来種問題の現状と課題に関して、日本生態学会外来種検討作業部会を中心とする研究者、中央省庁および地方自治体、NGOの活動を網羅した初めての総合的なハンドブック。日本における最新の外来種リスト付き。

地人書館 定価(本体4000円+税)

タイリクバラタナゴ

●原産地と生態

揚子江水系を中心とするアジア大陸東部原産のコイ科魚類である。平野部の池や河川の淀みなどに生息し、他のタナゴ類と同様、淡水二枚貝のドブガイなどに産卵する習性を持つ。オスは繁殖期（3～9月）になるとバラ色の婚姻色を現し、貝の周囲になわばりを形成する。求愛されたメスは、貝の出水孔を覗き込みながらタイミングを見計らい、一気に長い産卵管を出水孔に挿入し産卵する。その後、オスは貝の入水孔の上で放精し、精子はえら内で卵と受精する。貝に保護された卵・仔魚は、約1カ月後に貝の出水孔から泳ぎ出る。

●侵入経路と分布の拡大

本種は、1942年に揚子江九江付近から食用に移植されたハクレンなどの種苗に混じり関東地方に導入されたものが、放流によって分布を広げた。琵琶湖へは1960年代の初めに霞ヶ浦で養殖されたイケチヨウガイと共に卵が運ばれたと推測され、その後、沿岸域で数多く見られるようになった。琵琶湖産アユの全国的規模の放流を考えると、それへの混入が分布域拡大の一因と推測される。さらに、観賞魚販売による全国的な移動も、分布の拡大に大きく加担しているようである。

●交雑による遺伝子の漫透と攢乱

本種の侵入はたいへん複雑な問題を抱えている。それは、琵琶湖・淀川水系以西に生息する同種の固有亜種ニッポンバラタナゴと容易に交雑することである。日本で独自に進化してきた亜種ニッポンバラタナゴの歴史が今、消滅しつつある。



タイリクバラタナゴ。腹びれ前縁に鮮明な白線がある。ニッポンバラタナゴにはこれがない。

腹びれ前縁にある白線の有無が、本亜種とニッポンバラタナゴを容易に見分ける特徴である。しかし大阪府内では、1970年代の半ば頃から、両亜種の中間的特徴を持つ交雑個体らしきものが発見され始めた。八尾市^{やお}の溜め池で遺伝的マーカーを用いて調べた結果、交雑により本亜種の遺伝子頻度が増加する傾向が示された。

現在、交雑個体群は、四国や九州では拡大しつつあるが、大阪府においては環境の悪化に伴って減少する傾向にある。一方、八尾市で保護されているニッポンバラタナゴは約 20 の個体群が現存している。

●近縁種との競争

本種のもう一つの影響として、在来種との競争が問題となる。関東の平野部の浅い池や河川の淀みに生息し、ドブガイを産卵母貝とするゼニタナゴが、本種が侵入してから数年後にはほぼ絶滅した事例が、^{つるみ}神奈川県鶴見川水系の池から報告されている。ゼニタナゴは秋に産卵（9～11月）するので、本種とは産卵期が異なるが、一時的に競争関係が生じる可能性はある。しかしながら、関西地域では近縁種との競争関係はあまり知られていない。

現在のところ対策は、池干しをして在来種を移植し保護する方法もあるが、在来種が生息する地元の理解と協力を得ながら、人為的な分布拡大ができる限り抑え、在来種が生息しやすい環境を保全することが重要である。

参考文献

- 加納義彦 (1994) バラタナゴ, *Rhodeus ocellatus*, の 2 亜種間に
おける雑種化について. THF 研究助成報告 9: 7-15.

勝呂尚之 (1997) 淡水魚の危機. かながわの自然 59: 20-21.

長田芳和 (1980) タイリクバラタナゴ. 「日本の淡水生物—侵略と
搅乱の生態学」(川合楨次ほか編), pp.147-153. 東海大学出版
会.

Kanoh, Y. (2000) Reproductive success associated with terri-
toriality, sneaking, and grouping in male rose bitterlings,
Rhodeus ocellatus (Pisces: Cyprinidae). *Env. Biol. Fish.* 57 :
143-154.